

第七編リチャードリーキーに学ぶ「人類誕生の歴史」

(1) 「人類」という言葉の持つ普遍性

人類という言葉は、ある意味で世界市民的な言葉でもある。世界190カ国といわれる国々が地球という共通の星の上に生活しているからだ。この簡単な事実を踏まえる時、未来の子供達はコスモポリタン（世界市民）的概念の上に教育されねばならないと気付く。日本人としてのアイデンティティを確立しつつ、世界市民として全世界の国の人々と付き合いしていくために必要な要件は、何なのだろうか。お互いを表現するための道具の一つとして英語、国際感覚（the sense of internationalism）、「生きる力」（the zest for living）は必須の項目だが、もう一つは「世界史」（the World history）だと思う。「世界史」を学ぶ事は、人類が歩んできた発展の道筋をたどることであり、同時に、興亡の歴史から、人類普遍の知恵や教訓を引き出すことを意味している。そして人類の未来を見通す力を付与することになる。私たちは、今アフリカのケニアで学び、生活をしている。ビクトリア湖畔に、そしてツルカナ湖畔に人類誕生を物語る多くの遺品や人骨が発掘されており、世界の注目を集めている。人類と言う共通の呼び名の上に立つ、人類の祖先を尋ね、現代世界が歴史的に形成されていく過程を知り、文化の多様性や複合性や相互交流を、広く考察する歴史的思考力（国際交流史観）を身に着けていくことは、大切なことだと思う。日本人が、かつて島国に閉じこもっていた時代が、260年近くあり、明治維新でその扉を開いてから、まだ136年である。これからの子供達は、10年後、20年後には大人に成長し、日本を担う若者に育つはずだ。そして彼らの活動の場は、間違いなく「国際社会」であると自覚しなければならないと思う。日本人の遺伝子は、決して260年間で強制された「島国的なもの」ではない。同じ島国から始まったイギリスと同様の、勇猛さと国際性を持っている事は、織豊時代の、色々な例が雄弁に語っている。しかし、かつての侵略的な海外雄飛を目指す時代は終わっていることも事実である。日本国憲法の「前文」に語る国際協調の精神を同時に培わなければならないと思う。これが、所謂「国際人」の必須の要件といえるのではないだろうか。

(2) 最古の人骨は、アフリカから

人類は霊長類ヒト科の動物で、直立して二足歩行し、両手で道具を作って労働するというので Tool Making Animals と呼称される。彼らは、集団で狩をし、火を使い、言語を持っていた点で文化を持っていたといえる。現在のところ最古の人類と認められるのは、アフリカで発見された400万年前のアウストラロピテクスや300万年前のホモ=ハビリス等の猿人（Ape man）である。彼らの流れから人類の祖先であるホモ=エレクトス（Homo Erectus）、更にホモ=サピエンス（Homo=sapiens）と進化を遂げたと言われている。しかも、東アフリカで発見されたヒト科に属する人骨の物語る歴史は、人類共通の祖先の歴史

であるとされる。先ずヒト科の人骨は、ケニアのツルカナ湖 (Lake Turkana) の東岸で発見され、約 400 万年前から 350 万年前の人類最古の人骨と認定された *Australopithecus afrensis* が最初の走者であった。そして約 300 万年前から 200 万年前に同時期に 3 種類のヒト科の人骨がツルカナ湖の東部で発見された。この 3 種類は少なくとも 100 万年の間同時に存在したものと推定されている。つまり *Australopithecus boisei*, *Small brained gracile hominid*, *Homo habilis* である。そしてこの *Homo habilis* が、150 万年前に *Homo erectus* に、そして約 10 万年前に最終走者である *Homo sapiens* という現代人類の祖先へと進化のバトンを手渡したと推定されている。

(3) 人類の起源を語るツルカナ湖、3 種類の人類の先祖が 100 万年も並存

この進化は、東アフリカを舞台として行なわれており、しかも大地溝帯 (the Great Rift Valley) の作った湖であるツルカナ湖で発見されているのである。人類の過去を解明する鍵は、ツルカナ湖畔のクービフォーラ (Koobi Fora) にある。しかも数百万年を超える日月の間継続してきた仕組みが今日も続いている。つまり川の氾濫、湖の水位の上昇、骸骨は埋められ、数百万年後の将来、再び現れて謎を解明する糸口として保存されるのだ。この地域の生物は日々気候と環境の変化につれて進化を遂げている。これが、ケニアであることを踏まえ、人類の普遍性を学ぶ格好の教材としなければならないだろう。人類の共通の祖先である *Homo sapiens* が出現するための自然環境が整っていた。現在のような乾燥した亜砂漠化した気候ではなかった。この Koobi Fora の探索は、少なくとも 20 種類以上の動物の骨を識別している。つまり大型哺乳動物、アンテロープ、縞馬、野猪、2 種類のキリン、2 種類の河馬、そして肉食獣。犀や象の骨はないが、バブーン、蛇、鳥、ヤマアラシなどの骨が見られる。石器も、剥片石器や骨の破片を使ったものから、次第に鋭い動物の角から加工した道具などが発見されている。この地域の地勢的な特徴は、川の岸边にあり、かつ三角州を形成していることだろう。その地層が比較的温存されており、骨は細かく砕かれていても一箇所で発見されることが多かったようだ。こうした哺乳類を引き寄せる古気候 (Palaeoclimate) は、現在よりも涼しくかつ湿潤で、豊かな水量の川が流れ、小さな川が注ぎ込んでおり、その周りに森林が広大に繁茂していたし、濃密で豊かな草原が灌木のサバンナまで続いていたと思われる。しかし 200 万年の間に、徐々に降雨量が減り、植物相にも絶えず変化が齎され、今日のような亜砂漠的気候となってしまった。Koobi Fora では、魚、亀、鱶などの哺乳動物以外の生物にも進化を与えている。鱶には、3 体の変遷を見せている。 *Crocodylus cataphractus* と *Euthecodon brumpti* は、生きていれば全長 10 メートルを超える。そして現在の *Crocodylus niloticus* である。そして最後の鱶は、ツルカナ湖に沢山生息しており、化石の世界には存在しない。また 300 万年以上前に Koobi Fora の地域を闊歩していた動物には、現在のアフリカの哺乳動物の先祖がいた。中には絶滅した種もある。大物にはアフリカ象やアジア象の親戚に当たる *Deinotherium* がいた。下顎から突き出るような大きな牙が生えていた。白と黒犀、ピグミー型の河馬を含む 4 種類

の絶滅した河馬類、4種類の縞馬、化石の驢馬、三蹄馬（Three-toed horse Hipparion）を復元させた。キリンも3種類、（the Long-horned, shortnecked Sivatherium, 本物のキリン）、野生の駱駝、アンテロープは、40種類に及んでいる。肉食動物も進化を見せている。ライオンやレオポルド、ハイエナ、ジャッカル、カワウソ、猿、バブーン等で今日よりも遥かに多種多様であった。人類もまたその傾向を受けて3種類の人類の先祖が並存していた。

（4）火山灰をつかった年代の照合

化石発掘物と年代の照合との相関関係を正しく捉えることは、決して容易ではない。しかし Koobi Fora の場合、ユタ大学の Frank Brown と Thure Cerling 両博士の努力によって可能になった。それは火山灰による照合（Volcanic Markers）と言う方法で、古代の火山活動で吹き上げて、降り積もりまたは沈殿した火山灰（Tuffes）の成分を分析し、異なった場所の地層断面の相関関係を400万年前に遡って証明することに成功した。その結果、湖の存在が信じられていたにもかかわらず、実は長期にわたり巨大な河川システムであったことや、インド洋に注いでいたことが判明した。現在のオモ（Omo）川が沢山の堆積物を流し込んでおり18万年でこのベースンを埋めてしまうだろう等の予見が立てられている。

（5）大地溝帯の秘密

月から裸眼でも見えるほどの大きな地球の裂け目、大地溝帯（the Great Rift Valley）は、紅海からモザンビークに走る地表の弱い部分にできたクラックであり、断層である。そしてそこに湖や火口や溪谷ができています。そして人類の先祖の遺品や骨が沢山見つかっている。つまり人類だけでなく哺乳類を含む生物を奇跡の星といわれる地球に送り出す上でこの大地溝帯という自然環境が何らかの働きをした可能性は否定できない。そうした舞台のひとつが、ツルカナ湖（Lake Turkana）である。現在のツルカナ湖は全長257キロメートル強、幅31キロメートルで、犬の足（Dog's leg）状である。エチオピア高原から水を注ぎ込むオモ（Omo）川が供給源で、排水口は閉ざされている。従って水位はオモ川の増水と減水で約95センチメートル程変化する。平均降雨量は、356ミリメートルに過ぎない。水質はアルカリ度9.2で飲料には適さないが、野生の生物にとっては計り知れない貴重な湖である。しかし1世紀前の記録では、オーストリアのサムエル・テレキ（Samuel Teleki）伯爵が1888年に探査した時に、沢山の犀や野牛やウオーターバックを見た記録している。今日の植物相では、とても数は知れている。また1888年には湖の水位は、現在よりも約15メートル高かったとの記録もある。

（6）リチャードリーキーの仮説

Koobi Fora の重要さに最初に気付いたのは、先史代の研究者 Richard Leakey である。彼

は1967年に、オモ川探検隊 (Omo Research Exploration) に参加している。彼は天候不順のためにエチオピアに飛ぶ飛行機が遠回りをすることになり、偶然にも当時ルドルフ湖 (Lake Rudolf) と命名されていたツルカナ湖に立ち寄り、巨大な堆積層に気付いた。更にヘリコプターで堆積層に近付き、たちまち堆積層から露出していた多くの化石や石器を発見した。1968年に彼は再度小探査を行ない、1970年代には the Koobi Fora Research Project として国営博物館によって取り上げられ、彼が中心となって多数の国々の科学者が参加し探査が行なわれた。この探査に参加した学者たちの手で、300万年前から100万年前のより完全な絵が描かれることになった。現在はキャンプが継続しており、各国の学生が、化石学や考古学、地質工学を学び且つ直接野外活動をしている。そして1972年に、ケニア政府は Koobi Fora などの遺跡埋蔵地区を保護し、野生の生物を保護するために、ここをシビロット自然公園 (Sibiloit National Park) に指定した。Koobi Fora は現地名で、その意味はアカシアと灌木の茂る場所 (Place of the Acasia and Commiphorabush) のことである。プロジェクト本部 (The Project Headquarter) があるだけでなく、灌木 (Commiphorabush) が群生している。

リチャードリーキーは、其の研究の成果を「the Origin of Humankind=人類の起源」と題して出版している。彼の父は、ビクトリア湖の東側に多くの貝塚や人骨を発見したルイスリーキー (Louis Leakey) である。そして彼は「ツルカナボーイ (Turkana Boy)」とあだ名されたホモ エレクトス (Homo Erectus) のほぼ完全な骸骨一体を発見している。彼は、20年間に亘りケニア博物館のディレクターであった。著作には、「Origins (起源)」「The People of the Lake (湖水の住人たち)」や「The Sixth Extinction (第六番目の死滅)」「The Making of Mankind (人類の生い立ち)」がある。

彼は、中部アフリカが、ホモ エレクトス (Homo erectus) を生み出し、それが更に200万年掛けてホモ サピエンス (Homo sapiens) に進化を遂げ、人口も増えたことから、ホモエレクトスやホモサピエンスの形でアフリカから欧州、アジア、アフリカに拡大し、更にホモ サピエンスに一本化していったという仮説を立てている。そして化石人骨の分布と年代では、欧州でのみ発見されているクロマニオン人 (Cro-Magnonman) が4万年前であり、ネアンデルタール人 (Neanderthalensis) が10万年前から3万5千年前であるのに対して、Koobi Fora が10万年前、Omo が13万年前、Laetoli が12万年前、Awash が30万年前と推定され、Broken Hill ,Zambia が11万年前、Border cave が11万5千年前、Klasies River Mouth が10万年前、Qafzeh が9万2千年前、現代人類の最も古い種の発見は、サブサハラアフリカと中東でなされていると主張している。

(7) 人種の成立へ

かくして、人類は、地球全体に広がり、各地で環境に応じた独特の生活様式を営む。完新

世（約1万年前）になると、気候も温暖になり、暖系の小型獣（野猪、鹿など）や水鳥、魚介類などが繁殖し、人類は、自然環境の変化に対応しながら、地域ごとに生活様式を変えていった。この時代を新石器時代と呼び、打製石器から磨製石器へ、採集、狩猟から農耕・牧畜の定住生活へと変遷する。この過程で、世界各地の人類の間に、身体上の特徴の違いが大きくなり、人種の区別が完成する。つまり白色人種（Caucasoid）、黒色人種（Negroid）、黄色人種（Mongoloid）である。また発生学の起源からすると、アフリカではバンツー系（Bantu）とナイル系（Nilosaharan）の2大種族があり、それに西アフリカ系（West African）が加わり、更にピグミー（Mbuti Pygmy）が上乘せになる。それにブッシュマン（San-Bushmen）とエチオピア系（Ethiopian）の流れが合流している。日本人は朝鮮人とともに一角をなしており、それにチベット族が一番近い系統として加わる形になるらしい。

（8）ケニアの自然は人類共通の宝

果てしなく広大無辺のサバンナに草を食む草食獣とそれを狙う肉食獣の緊張と持たれ合いの相関図には、人類発生の歴史を共にしてきた生物連鎖の不思議が残る。神秘の湖とされるツルカナ湖。そして数限りない秘境を作り出す大地溝帯（the Great Rift Valley）の不思議な力。ケニアの自然は、どの国にも負けないだけでなく、その底知れない神秘の力はかけがえのないものといえる。どうしたら其の力を守ることができるのだろうか。地球は生きており、自然条件や環境は変化している。否、悪化しているといってもいいだろう。野性動物の生存条件は、必ずしも安寧ではない。人類の生命を生んだと思われるケニアの自然を守ることは、人類にとって何か特別の意味合いがあるように思えてならない。

参考文献

- ① A Guide to KOOBI FOR A, The East Turukana Fossil Sites
(Foreword by : Richard Leakey)
- ② The Origin of Humankind (Richard Leakey)
- ③ The Wisdom of BONES in search of Human origins
(Alan Walker & Pat Shioman)